

滋賀医科大学医学部附属病院における臨床勤務： 小児病棟における遊びの支援「瀬田の森 こどもく らぶ」の活動報告（実践報告）

著者	白坂 真紀, 桑田 弘美
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	13
号	1
ページ	51-53
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10422/9304

—実践報告—

滋賀医科大学医学部附属病院における臨床勤務 —小児病棟における遊びの支援「瀬田の森☆こどもくらぶ」の活動報告—

白坂真紀, 桑田弘美

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

要旨

本学では、文部科学省平成 21 年度「看護師キャリアシステム構築プラン」に採用された「臨床教育看護師育成プラン～他分野の知を結集し臨床看護教育者を育てる～」プロジェクトを展開しており、病院と大学との unification や積極的交流をはかっている。臨床看護学講座（小児領域）では 2014 年 1 月から臨床勤務として小児病棟に入院する子どもと家族への遊びの支援に取り組み始めた。本稿では過去 6 回実施した遊びの支援を振り返り、成果と課題をまとめた。結果、参加した子どもと家族は楽しんで参加されていた様子がうかがえた。今後の課題としては、提供する遊びのバリエーションを広げること、ボランティア学生の一定人数の確保であった。開催回数を増やすことも検討したい。今後、子どもとその家族が入院治療生活を送る中でも楽しい時間が増えるよう、個別に細やかな対応ができるよう支援をしたい。

キーワード：小児病棟、遊び、unification、臨床勤務

はじめに

本学では、文部科学省平成 21 年度「看護師キャリアシステム構築プラン」に採用された「臨床教育看護師育成プラン～他分野の知を結集し臨床教育者を育てる～」プロジェクトを展開しており、臨床（病院）と教育（大学）との unification など交流を行っている¹⁾。小児領域においては、病院側からは小児病棟スタッフによる看護学科学生への演習指導が行われている²⁾。大学教員側からは、臨床勤務の一環として病棟に入院する子どもと家族への遊びの支援に取り組んでいる。2014 年 1 月より「瀬田の森☆こどもくらぶ」の名称で、教員が学生ボランティアの協力のもと実施している。本稿では、小児病棟で実践した全 6 回の遊びの支援について振り返り、その成果と課題を述べる。

臨床勤務「遊びの支援」の内容報告

1. 「遊びの支援」実施方法

- 1) 遊びの支援を実施する目的と内容、日時について記載した臨床勤務計画書を病院の看護臨床教育センターに提出した。
- 2) 開催 1 週間前に病棟保育士と打ち合わせを行った。
教員が病棟師長と保育士に遊びの内容を伝え、入院患児の年齢層や家族の様子を踏まえて、遊びの内容を検討した。病棟に開催日時と内容をお知らせするポスターを掲示した。
- 3) 看護学科棟の掲示板に、学生ボランティア募集のポスターを貼り、遊び支援をお手伝いしてくれる学生を募った。
- 4) 小児看護学講座で、遊びや作品をつくるための材料を準備した。
- 5) 当日 10～12 時に遊びを実施した。保育士の協力

のもと、プレイルームで設営を行った。教員が保育士より入院中の子どもと家族の情報を得て、子どもを担当する学生に伝え支援を促した。

- 6) 子どもと家族、子どものみ、母親のみなど参加形態は様々で自由であった。参加対象者が作品作りに集中し楽しめるよう、ボランティア学生が支援し対応した。具体的には、対象者と一緒に折り紙や粘土などを用いて作品をつくり遊んでいた。教員は、保育士と連絡を取り合いながら、室内安静の子どもへの訪室などの調整や学生を支援する役割を担った。院内学級の教諭と授業の進行状況や遊びに参加したい子どもの様子を確認し、なるべく多くの子どもと家族が参加できるよう調整した。
 - 7) 終了後、後片付けとあいさつを行い、解散とした。
2. 倫理的配慮について
入院患児と家族の情報の取り扱いにはとりわけ注意するなど、個人情報の保護について倫理的な配慮を行った。
3. 学生のボランティア参加の動機
ボランティア学生は全員が本学学生であり、参加動機は、「子どもが好き」、「小児看護に興味がある」、「子どもと接した経験がなく実習が不安」、「（小児病棟主催の病気を治療している子どもたちの）キャンプに参加して楽しかったため」など様々であった。
4. 「遊びの支援」の概要
第 1 回（1 月 23 日）
テーマ：「シール遊び」
参加者：子ども 6 名（幼児 6 名）
家族 6 名
ボランティア：看護学生 4 名

第2回(3月6日)

テーマ:「写真立て作り」

参加者:子ども9名(幼児6名・学童3名)
家族9名

ボランティア:看護学生6名

第3回(4月24日)

テーマ:「樹脂粘土遊び」

参加者:子ども11名(幼児6名・学童5名)
家族11名

(室内安静への個別対応3名)

ボランティア:看護学生6名・大学院生1名

第4回(7月31日)

テーマ:「樹脂粘土遊び」

参加者:子ども5名(幼児1名・学童4名)
家族5名

ボランティア:看護学生3名・大学院生1名

第5回(8月28日)

テーマ:「折り紙・切り紙遊び」

参加者:子ども17名(乳児2名・幼児9名・学童5名・思春期1名)

家族13名

(うち室内安静への個別対応8名)

ボランティア:看護学生10名・医学生3名

他領域教員1名

第6回(9月25日)

テーマ:「写真立て作り」

参加者:子ども11名(乳児1名・幼児7名・学童3名)

家族9名

(うち室内安静への対応6名)

ボランティア:看護学生6名・医学生1名

各回を通して、子ども達は楽しそうに作品を作っていた(写真1)。子どもだけでなく、母親や父親が参加して、作品を作って遊ぶ様子も見られた。時折、看護師や院内学級の教諭が様子を見に来たり、作品作りに参加することもあった。家族からの反応としては、「写真立ては気軽に手作りできて良かった」などの反応があり、作成後はすぐに写真を入れて飾られていた。「子どもが室内安静の時には部屋に学生さんが来てくれて、一緒に遊んでもらえることが助かる」という声も多かった。子どもには樹脂粘土遊びが特に人気であった。病棟保育士からは、「実施回数を月1回程度に増やしてほしい」という要望があり、「プレイルームに出て来られない個室安静の子ども達への訪室の遊び支援はありがたい」という感想が得られた。検査や処置のため参加できない子どもに対しては、作品の材料を保育士に預け、保育士や家族の支援のもとで子どもが実施できるよう配慮した。

ボランティアに参加する看護学生の学年は、ゼミ生がいる4回生が最も多く、次いで3回生、1~2回生は少数であった。看護学科・医学科ともに男子

学生の参加もあった。



写真1 作品(樹脂粘土と写真立て)

考察

1. 遊びの内容について

遊びの内容は、子どもたちが達成感を持つことができるように、作品を作るなど、出来た物が形として残ることを基準に考えている。全6回のうち、シール遊び1回、樹脂粘土遊び2回、フォトフレーム(写真立て)作り2回、折り紙・切り紙遊び1回であり、子どもたちに特に好評であった遊びは複数回行った。対象は長期間の入院になることも多いため、子どもたちが飽きないよう、遊びの種類を豊富に準備することも必要であると考えた。内容も、幼児期から学童・思春期、母親はじめ家族が楽しめるような遊びの実施を目指したい。遊びの支援中は、子どもの安全には十分配慮するよう、子ども一人に学生ボランティア一人以上が付き添うことを基本とし、ハサミなども用いている。家族である成人の方にとっては、「作品を作る」ということを楽しんで行われる方と難しく考えて構えてしまう方がおられるが、慣れない方でも簡単に出来るようなデコレーションテープやシールで完成する写真立ては好評であったのではないかと思われた。

2. 開催日時と開催回数

開催日は病棟の予定(イベントが重ならないような配慮など)と教員の予定を考えて日にちを決定している。開催時間帯は、幼児期の子どもはその生活リズムより午睡の時間が生じる。3~4歳頃までには昼寝をしなくなるといわれているが³⁾、午前の実施が望ましいと思われる。学童期の子どもは、院内学級での学習時間と重なるため、希望する児童は院内学級教諭と相談の上、休み時間など配慮して参加している。今後も、子どもの学習の進捗状況にも気を付けながら継続していきたい。検査や処置などで10~12時の時間帯には遊びに参加できない場合も、作品の材料を取り分けておき、後に、保育士または家族の支援により実施してもらえるよう配慮している。遊び支援の開催は、看護学生の実習期間

(5月~7月中旬、10月~12月中旬)を除く時期に月1回の開催を目標として実施した。保育士より、

子どもや家族の反応を踏まえ、遊び支援の回数を増やしてほしいという要望をいただき、今後は回数を増やすことが可能か検討している。

3. ボランティア学生の参加について

ボランティア学生は看護学科学生だけではなく、医学科学生の参加もみられるなど、初回より回を重ねるごとに4名、6名、7名と参加者が増える傾向にあった。しかし、参加する子どもたちが少数であったため対応はできていたものの、7月は学生の試験期間と重なっていたため4名だけになることがあった。翌月8月の学生の夏季休暇期間の参加者は最大数の13名であった。これらより、ボランティア学生を一定人数確保するためには、学生が参加しやすい時期を考慮する必要があったと振り返る。

開催フィールドである小児病棟の特徴を知り、小児看護について実践を通して学んでいる小児看護学実習を終了した4回生が多数参加してくれていることは、子どもの安全を守り、子どもが楽しめる支援を行う上で重要なボランティアの人材である。学生の人数に余裕があるときは実習を経験していない1～3回生と4回生でペアを組んで子どもや家族への対応にあたるなど、子どもと家族のニーズと学生それぞれがもつ期待にも応えられるような工夫が必要である。

結論

本学ユニフィケーションの一環として行っている教員の臨床勤務「小児病棟における遊びの支援」について報告した。入院治療中の子どもと家族が楽しめる時間を提供するという目標は概ね達成されていた。課題としては以下の3点があがった。

1. 子どもと家族が安全に安心して遊ぶことができる環境を提供するため、一定人数の学生ボランティアを確保する。
2. 長期入院の患児や家族が飽きないように、遊びの内容の種類を増やす。
3. 「遊びの支援」の開催回数を増やすことが可能か、質の確保とあわせて検討する。

おわりに

今年の病棟クリスマス会は実習終了後のクリスマスイブに行われる予定である。第7回目の「瀬田の森☆こどもくらぶ」の出し物として「バルーンアート」を行い、子どもとご家族と楽しく風船で作品を作って遊ぶ準備をしている。

謝辞

「瀬田の森☆こどもくらぶ」の遊びに参加してくださる子どもたちとご家族、コーディネイトや協力してくださる看護臨床教育センターの多川晴美先生、5A病棟川根伸夫師長、兼安正恵保育士、病棟スタッフの皆様、学生ボランティアの皆様にご感謝申し上げます。

文献

- 1) 藤野みつ子, 瀧川薫, 澤井信江: 文部科学省「看護職キャリアシステム構築プラン」紹介! 滋賀医科大学臨床教育看護師育成プラン—専門分野の知を結集し臨床看護教育者を育てる—, 看護管理, 21(3), 252-255, 2011
- 2) 白坂真紀, 小野幸子, 桑田弘美: 小児看護学演習における看護学生の学び—滋賀医科大学附属病院臨床教育看護師の指導を受けて—, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12(1), 31-34, 2014
- 3) 奈良間美保, 丸光恵: 第5章 幼児・学童, 小児看護学総論 小児臨床看護総論, 109, 医学書院, 2012